

トップページ：<http://mylibrary.maedal.jp/>

ブログ「石油と中東」：https://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943

マイライブラリーNo. 0595

(注)本稿は2024年1月15日から19日まで3回に分けて「ブログ・石油と中東」に掲載したレポートをまとめたものです。

([英語版](#))

([アラビア語版](#))

2024. 1. 21

戦後ガザはどうなるのか？当事者たちの本音と本性



10月7日のハマスによるイスラエル入植地奇襲をきっかけに始まったガザ戦争は、イスラエル軍がガザ北部を焦土化し、南部でも都市部に張り巡らせたハマスのトンネル網をしらみつぶしに攻撃する悲惨な市街戦が繰り返されている。パレスチナ側の死者は女性・子供を含み2万人を超え、ハマスにとらえられた人質の多くも解放されず停戦の気配は見えない。国連安保理も機

能マヒしたまま時間だけが過ぎていく。イスラエル軍とハマスの戦力の差は圧倒的であり、戦争がいずれイスラエルの勝利で決着することは衆目の一致するところであろう。ただ戦後のガザがどのような形になるかは不透明である。

ここでは当事者たちの本音と本性がどのようなものかを探りながら、戦後ガザの姿を推測してみよう。

ネタニヤフ極右政権の本音と本性

完全比例制のイスラエルでは政党が乱立している。現在のネタニヤフ政権は極右政党がキャスティングボートを握り、彼らはユダヤ民族の本音と本性をむき出しにしている。

彼らはユダヤ人が神に選ばれし者であり(選民思想)、イスラエルの土地ははるか昔に神から与えられたものである、と主張している。ユダヤ人は2千年前に祖国の土地を追われ(ディアスポラ)、移り住んだヨーロッパ各地で蔑視され抑圧された。さらに第二次大戦では1千万人以上が強制収容所のガス室に送られた(民族浄化)。金融業で成功したユダヤ人は、第一次世界大戦で欧米連合勢力を支援し、見返りとして祖先の地イスラエルを取り戻した(バルフォア宣言)。彼らは「民なき土地に土地無き民を」をスローガンにヨーロッパから移住した。「民なき土地」と呼ん

だパレスチナであったが、もちろんそこにはディアスポラ以前からアラブ人が連綿と住み続けていた。スローガンとは時に荒唐無稽であっても響きが良ければ実態とは無関係に利用されるものである。

第二次大戦後にイスラエルは国家として独立した。そして4度の中東戦争で周辺アラブ諸国を完膚なきまでに打ち砕き、「不敗神話」を打ち立てた。一方でユダヤ人は自分たちをゲットー(ユダヤ人居住区)に押し込め、最後は強制収容所で死の苦しみを与えたヨーロッパ各国に絶えず贖罪意識を喚起した。米国に移住したユダヤ人たちは世界の超大国にのし上がる米国の政治・経済を牛耳り(ユダヤロビー)、さらにキリスト教の聖地エルサレムをアラブ・イスラム教徒から守るという看板を掲げて、米国の世論をイスラエル支持一色に染め上げた。

ネタニヤフ政権の本音と本性は上記のことから次のように読み取れる。まず敵との戦争が不可避と判断されれば躊躇せず先制攻撃を行うこと、そして国際世論を敵に回してでも手段を選ばず敵を徹底的に壊滅することである。イスラエルにとって攻撃こそ最大の自衛策であり、勝利こそ全てを正当化する。今回のガザ戦争でハマス側に先制攻撃されたことは誤算であったが、直ちに報復しハマスをせん滅するまで戦いは止めないと明言している。

イスラエルがここまで強気なのは米国が絶対に見捨てないと確信しているからである。またガザとウクライナの二重紛争にうんざりしつつあるヨーロッパ諸国に対しても折に触れてアウシュビッツの贖罪を持ち出して牽制している。冷酷なイスラエルに妥協と言う言葉はないのである。

欧米・イスラム諸国の本音と本性



自国の偉大さを信じ、親子兄弟が戦場で戦っている現状で、大多数のイスラエル国民はテロリスト・ハマスのせん滅が戦争終結の必須条件であると確信している。戦時体制下、しかも勝利が確実であると自他ともに認めるなかでは無条件即時停戦など問題外であろう。平和を標榜するだけのひ弱な知識人は排除され投獄される。戦争とはそういうものである。

それではガザ戦後処理の利害関係者(ステークホルダー)である欧米或いは周辺イスラム諸国の

対応はどうであろうか。問題は本音と建前の使い分けである。

ヨーロッパ各国は、ガザ紛争がイランを含む中東全域に拡大し、それを導火線にヨーロッパでイスラムテロが頻発することを恐れている。しかし強力な仲介者がいない中でただ人道的停戦を求めるだけではナンセンスである。それが戦争の現実というものであろう。一方、平和の掛け声の陰で米国、フランス、ドイツなど先進軍事大国は大量の兵器を輸出し、防衛産業は我が世の春を謳歌している。彼らの本音と建前のギャップは小さくない。

周辺イスラム諸国の本音と建前はもっと単純である。彼らはアラブ・イスラム国家としてのパレスチナの独立を支持し、無辜の女性や子供を大量殺りくする(ジェノサイド)イスラエルを非難する。そして人道的な支援は惜しまない。

しかしパレスチナが政治的に独立し、自分達と対等になることを望んでいるとは思えない。特にサウジアラビア、UAE など湾岸の専制君主国家にとっては、民主化されたパレスチナとシーア派イランの挟み撃ちにあう可能性が高い。パレスチナが形式的な独立を保ちながら、イスラエル支配のもとで周辺国の食料や医療支援に頼って細々と生きていく。それが周辺アラブ諸国の本音であろう。無気力と腐敗が広まっている現在のヨルダン川西岸パレスチナ自治政府の姿と重なる。

各国は国連安保理の呼びかけに応じないイスラエルに経済制裁を課するでもなく、ただ2国家共存論を唱えるだけである。さらにイスラエルの非人道性を声高に叫びながら、その一方安保理で拒否権を発動してイスラエルを擁護する米国の姿勢(二枚舌外交)を前に国連は機能不全に陥っている。そしてロシアと中国はイスラエルと欧米を非難し、ハマスの過激な行動に自制を促すものの自らは傍観者の立場を変えない。結局、国際政治の舞台でこの2か国が漁夫の利を得ている感がある。

どうなる？戦後のパレスチナ統治



ガザ戦争は圧倒的な軍事力を有するイスラエルが勝つことは間違いない。但し、ハマスの敗北宣言しないであろう。イスラエルは戦後ガザを直接統治することはない、と明言している。直接統治がリスクの高いことは誰の目にも明らかである。今回の戦争でガザの住民の反イスラエル感情が極限に達しており、その結果ハマスの残党あるいは過激化した若者による新たな都市ゲリラ活動が始まるであろう。彼らを武器面で支えるのはイラン、シリアなどであり、経済的に支援する周辺アラブ国民もなくなる。イスラエルの報復を恐れる湾岸アラブ諸国は、義勇軍を派遣する気は毛頭なく、物的な支援及び金銭的寄付(ザカート)に力を注ぐ。それは豊かな湾岸諸国のパレスチナ人に対する罪滅ぼし、或いは免罪符であろう。

戦後のパレスチナ統治は戦前と寸分変わらない姿になる。否、戦前よりさらにパレスチナ人に過酷な「天井なき牢獄」となるであろう。彼らは生存に必要な最小限の環境で、全く自由を奪われた生活を送る。そこに見える景色はナチス時代の「強制収容所」そのものであり、違うのは「ガス室」が無いことくらいであろう。パレスチナ人に対する人種差別(アパルトヘイト)がさらに過酷な様相を帯びる。パレスチナ人の心中にはこれまで以上の怒りと絶望が沸き立つに違いない。

ガザのパレスチナ人には全く未来が無いのであろうか。数十年単位で見ると彼らに明るい展望は開けない。ただ言えることは歴史は百年、千年単位で動くものであり、イスラエルのユダヤ教徒が未来永劫繁栄を続け、一神教の「約束された民」としてこの世の終末を迎えられるとは思えない。パレスチナのアラブ人も同じ一神教のイスラム教徒である。同じ一神教徒なら世界の終わりに同じように救われるはずである。(逆に言えば多神教のヒンズー教徒、悟りの仏教徒、共産主義の無神論者たち一神教徒以外のすべての人間がこの世の終末で地獄の責め苦に会う、ということになるのであろうが。)

しかしすべてことは有為転変する。奢れる者は久しからず。生者必滅。今日の「善」は明日の「悪」。人間世界に「絶対」はない。

無責任で暗い結論と読者の顰蹙を買うことは承知の上で、安易に平和を期待する進歩的文化人の自己陶醉は避けたいと思うばかりである。

以上

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

荒葉一也

Arehakazuyai@gmail.com